

日本史

アップデート

井伊直弼と桜田門外の変

- 井伊直弼は独断専行で米国の不平等条約を結んだと批判されるが、実際には天皇の勅許を待つべく慎重な姿勢を示していた。現場の役人の判断で条約が締結された後は責任を感じ、大老辞任をほめかしたとする記録も残る。
- 直弼は茶人としても知られ、わびの茶の原点を見つめ直し、「一期一会」という茶の湯の精神を表す

ここに注目!

言葉を広めた。地元の滋賀県彦根市を中心に、こうした文化的な功績の顕彰も進んでいる。
直弼が江戸城への登城途中で暗殺された桜田門外の変の新史料が、近年相次いで発見されている。ピストルの弾が胸に当たり、致命傷になったという証言など、事件の様子や直弼の最期の謎に迫る史料として注目される。

井伊直弼関連年表

文化12(1815)年	11代彦根藩主直中の十四男として誕生
嘉永3(1850)年	彦根藩主にペリール来航
嘉永6(1853)年	大老就任(4月)、日米修好通商条約調印(6月)、安政の大獄始まる(9月)
安政5(1858)年	
安政7(1860)年	桜田門外の変

条約締結に慎重姿勢



桜田門外の変絵図(部分) 岐阜県中津川市中山道歴史資料館所蔵



彦根城の井伊直弼の銅像

江戸幕府の大老・井伊直弼は、勅許を得ない日米修好通商条約の調印などに反対する公家や藩士らを弾圧(安政の大獄)し、桜田門外の変で暗殺された。幕末の2大事件の当事者で、マイナスの印象が強い。
この強権的な「悪人」のイメージは根深いものがある。明治時代以降、日本は欧米列強と肩を並べる近代国家に成長することが悲願だった。このため、勅許がなまま米国の不平等条約を結んだ直弼を国賊として扱い、戦前の国定教科書で「連れの臣下まで紹介された。一方、地元の滋賀県彦根市を中心に、日本を植民地化から救った「開国の元勳」として評価される。

直弼が条約締結の際、意外にも慎重な姿勢を示したことはあまり知られていない。米国の圧力が強まる中、「勅許を得ないうちは調印すべきではない」と主張。「(米国との交渉が)行き詰まった際は調印してもよいか」という役人の問いには、「その節は致し方ないが、なるべく引き延ばすように」と命じていた。「致し方ない」が調印許可の言葉と捉えられたのだ。
近年分析された彦根藩側

近の記録には、直弼は条約調印時に「諸大名の存意」を尋ねなかつたことを家臣に指摘され、後悔から大老の辞意をほめかしたとの記述がある。
一必ずしも独断専行ではなく、家臣の諫言を聞き入れようとする、等身大の直弼の姿を垣間見ることができると指摘する。
しかし、条約調印の責任は直弼一人に帰せられた。孝明天皇は激怒し、幕府を非難する文書を水戸藩を通じて諸藩に伝えようとした(戊午の密勅)。同時期に抱えていた將軍後継者問題では、紀伊藩主徳川慶福がふさわしいと主張する直弼と、水戸藩の徳川斉昭の子である一橋慶喜を推す一橋

派が対立。一橋派は天皇の意向を直弼追い落としの好機と捉えた。
幕府体制の根幹を揺るがす一連の流れが、直弼を安政の大獄に駆り立てる。密勅に関わったとして水戸藩を弾圧し、反幕府とみなした長州藩の吉田松陰や福井藩の橋本左内ら有能な人物も処刑した。
反直弼の動きは頂点に達し、桜田門外の変が起る。その後、幕政を掌握したのは一橋派だった。最終的に明治維新を主導した旧長州藩勢力は、松陰を顕彰する中で直弼を敵として扱った。死後の直弼が負のイメージを背負わされるのは必然だった。
神田外語大の町田明広教授(幕末維新史)は「直弼

にとつては、幕府の権威を守る上で安政の大獄はやむを得ない面もあった。歴史は勝者に有利なように書かれることが多く、より公平な目で直弼の功績を語るべきだ」と指摘する。
近年は直弼の文化的な功績に注目が集まる。直弼は井伊家の十四男で、兄の死去などの偶然が重なり、彦根藩主となったのは数え36歳と遅咲きだった。若かりし頃の城下の生活で禅や国学を学び、熱心に取り組んだのが茶の湯だった。自らの流派を創設し、千利休が先人が築き上げた、わびの茶の原点を見つめ直した。「一期一会」という茶の湯の精神を表す言葉を広めたのも直弼だ。
彦根市では今年4月から「井伊直弼公の功績を尊び茶の湯・一期一会の文化を広める条例」が施行されている。

「直弼の評価は地元と外で今も隔たりがある。史料に即して様々な功績を発信していきたい」と話す。(多可政史)